

井上円了の長岡学校在学時代と初期和同会

「和して且つ同ず」とは

福原国郎

Fukuhara kunio

長岡洋学校の設立から新潟学校第一分校へ

廃藩置県を迎え柏崎県所管となった長岡に、明治五年十一月二十三日、長岡洋学校が設立された。この時税制の改革はまだ行われておらず、年貢米の徴収があり、長岡の年貢は柏崎県へ納められた。旧長岡藩では年貢の運搬を藩で行っていたため、年貢の運送費として余分に百姓から徴収していた。柏崎県となった後も慣例的にその余分の年貢を百姓は払っていた。その余剰米に目を付けたのが旧藩大参事の三島億二郎らである。

この余剰米は換算すると二年分で二千円（両）程になった。戊辰戦争で町も城も焼いた旧藩関係者は、この余剰米で中等学校と病院を作りたいと柏崎県大参事南部廣孝に要望し許可されたのである。この金額に旧藩主の下賜金や町人などの寄付金を合わせ、半額を学校設立資金とした。こうして作られたのが長岡洋学校である。学校の教員や経営者は旧藩士と有力町人であった。

そもそも余剰米は百姓に返還するのが今では道理である。しかし公共施設の設立資金としての使用であったためか、開明的な大参事は理解を示した。もしかしたら長岡復興のためという名目で、旧藩士族の生活資金援助に

配分することもできたかもしれない。この余剰米に関して、後にそのような誤った憶測を生み、「米百俵」の物語（一時の困窮に耐え、食えないからこそ教育する）とほとんど同じ類話が語られている。そもそも「米百俵」という言葉は、昭和十八年、山本有三の戯曲によって作られたものであって、それ以前においては一般の知るところではなく、むしろこの余剰米という語によってこの概念は語られていたように見受けられる。（一）

長岡洋学校は恒久的な学校を目論んでの創立ではなかった。前記設立資金は一年分の経費とみており、あとは何とかなるかもしれないという見切り発車であった。それでも中等教育、特に英語教育の差し迫った必要性を三島等を感じていたのである。地域の人材育成が復興の礎だという認識があった。校舎は旧藩の政事堂を用い、費用の大半は教職員の人件費と英書などの教材費だった。当時の教科書は貸与制である。発足当時の生徒数十四人。教員一名。事務方職員二名。三島億二郎は非常勤の校長といった役割だった。生徒は徐々に増え、翌年には四十人程となり、手狭になった校舎を、五月二十三日に移転。元の旧藩家老稲垣平助郎が校舎となった。

長岡洋学校は一年続かなかつた。明治六年六月十日柏崎県が廃され新潟県に統一されると、県令の新教育方針が組織を変えた。同年九月、県下の洋学校は統一組織となり、新潟学校と命名され新潟を本校とし長岡を第一分校、柏崎・高田・新発田もそれぞれ順番に分校とした。その代わり資金と教員は県の負担となった。三島等は長岡の主体性を奪われるものと反対したが及ばず、英学教員藤野善蔵も教育方針の違いから当初の契約満期を迎える十一月下旬に辞職。もう一人いた数学の教員新井二郎や生徒兼教員である句読師、牧野練次郎と田中精一も同じ頃辞職して上京した。

十一月二十日、この穴埋めに英語教師と思われる助教梅浦精一、句読師津田東と武藤鳳六が新潟から派遣され、実質的な新潟学校第一分校の時代となる。約一ヶ月後三人は去り、英語教師は藤井三郎、小島銃三郎、中野悌四

郎へ、数学は松原秀成、松平正秀、奥村金太郎、高橋貫一へと次々に変わっていく。この間三年弱であった。

明治八年十一月新潟県令が交替し、教育方針も変化する。明治九年七月に新潟学校は百工化学校という実業の学問重視の学校となる(2)と同時に、各分校は廃止となり、長岡は仮学校の名で存続を図った。やがて長岡近隣町村出資の長岡学校となりひとまずは安定する。その後も政治や教育制度の変化に翻弄されるが、その都度存続の危機を乗り越えていく。以上は創立から明治二十五年までの長岡洋学校及び後続諸学校の歴史を記す『長岡学校沿革略誌』(長岡高校記念資料館蔵、平成十三年翻刻影印本刊行)等により記した。

井上円了入学

後の哲学者、東洋大学創設者井上円了が在学したのは、このような不安定な状況が続く時代だった。入学は明治七年五月。円了十六歳。長岡洋学校設立から約一年五ヶ月後、新潟学校第一分校となって八ヶ月後である。英学中心の学校であったから洋学校という呼称はまだ俗用されていた。当時は入学卒業の決まった制度はない。随時入学、随時退校。入学試験もなかった。円了在学中何人の生徒がいたかもはっきりしない。今の学校という概念とは大きく異なっており、学塾とか藩校に近かった。

入学生の年齢はまちまちで、学年という概念がなかった。いわばグレード制で等外から四級・三級と上がっていく一級で卒業となる。しかし明治十三年になって初めて二人の卒業生が出るまで、卒業はなかった。円了ももちろん卒業していない。卒業という制度もなかったのかもしれない。明治十九年、学校の経営が変わり「私立長岡学校」となり制度が変わったためか卒業生が少しずつ多くなった。それでも明治二十六年正式に「尋常中学」となるまでに、創立より通算約千人の入学生がいたが、卒業生はわずか七十一人だった。この時代のこのような

状況を「入学あれども卒業なし」という。その後明治二十九年を第一回卒業式とし、以後昭和二十四年まで毎年旧制中学として卒業生を出すようになる。

円了の入学とグレード配当は明治七年の「日誌」（長岡高校記念資料館蔵）に次のように記されている（読み下し文にして引用する。所謂古文書類の引用は以下同様）。

一 第十六大区小六区浦村、慈光寺住職井上円悟長男井上円了、同道入来。円了入門入塾之義、申込み之有り。
（四月三十日）

一 井上円了午後入門入塾。証書之を請け取り置く。本塾六番室へ入れ候事。（五月五日）

一 井上円了等外より第四の組へ繰り上げ候事。（五月七日）

「入門入塾」は学校への入学と寄宿舎への住み込みを意味する。「本塾」は別に「童子塾」があったことによる。明治六年十月寄宿舎を新築し、十一月二十八日、「新室を本塾、古室を童子塾と定む」と「日誌」に記載がある。円了が数日で「等外より第四の組」へ繰り上げられたのは、英語の初歩を「高山洋校」（高山楽群社）で一年間習っていたことによるのだろう。この「高山洋校」について円了は「夏日高山洋校に到るの作」と題する七言絶句を残し、結句に「我講堂に立ちて惠微を唱う」とある。「惠微」はABの当て字であること文脈による（『甫水井上円了漢詩集』所収、三文舎二〇〇八年発行、原漢文以下同様）。

長岡洋学校及びその校名変更をした後統校の第一資料である「日誌」は全て残存しているわけではない。そもそも開校から約一ヶ月半分を欠き（十一月末の開校だが、途中陰曆から陽曆への切り替えがあるため）、明治六年二月一日から始まって、この年は全部で六ヶ月分を欠く。円了在学中の明治七年から十年の間も、似たような残存状況で、年間の二割から八割の記録が残るだけである。生徒職員の動向、学校関係者の出入りなど人事に関する

る記録や、教科書・校舎設備等に関する記録が中心である。

円了入学時の様子を伝える資料は、彼自身が当時作った漢詩作品である。詩題に「五月五日」と自注のある「始めて長岡洋学校に到るの作」は次の通り。

独り長岡の市まちに到り 始めて洋学校に遊ぶ 講堂に終日坐し 頻りに誦す恵微声

正しくは「新潟学校第一分校」を「長岡洋学校」と呼ぶのは当時の慣用的な呼称で、「日誌」中にも散見する。「恵微声」はABC、または「恵微の声」でABの発音、アルファベットの発音のことか（前記漢詩集所収）。

当時の入学者

「長岡中学校入学者仮名簿」（長岡高校記念資料館蔵）というものがある。明治四十四年十二月に学校が名簿整理のため、判明している分の名簿を仮印刷し、同窓に配布して、追記・訂正の上、返送を求めたものである。明治五年から二十六年までの入学者名と住所等が記されている。ただし「日誌」に記される名前が落ちている場合もあり、精度は高いとは言えない。しかしこれが最も古い同窓名簿であり、価値は高い。

この名簿によれば、円了入学の年、明治七年までの入学者数は七十四名。族籍の欄に士族・平民の別が記されているものがある。士族三十三名、平民二十名、無記入二十一名。無記入の内、職業僧侶の二名を含め、住所から平民と思われるものが九名、他は氏名のみで手がかりがない。既に士族は半数以下だったと思われる。

明治五年の初入学者十四名の内、二人は平民で一人無記入。洋学校は当初から長岡藩士の独占する学校ではなかった。それは二年前の廃藩置県（長岡藩は他藩より一年早かった）により最早藩校ではなかったことにもよるが、平民教育の必要性を説いた小林虎三郎の思想と、それを引き継いだ三島億二郎の姿勢によるものだった。（3）

やや下るが、明治十一年十二月調べで生徒数五十名、翌年八月は四十四名（内通学生三十名、寄宿生十四名）という記録が「日誌」に見える。更に下って明治十七年三月、生徒総数八十九名、内士族二十二名とある。

入門入塾者と通学生

この頃「日誌」には度々「入門入塾」という語が出てくる。井上円了もその一人だ。洋学校時代の初期は、ほとんどが入門入塾者であったようだが、それは入学と同時に寄宿舎に入ること、完全な学校管理下に入ることの意味した。もちろん門限があり、明治七年頃は度々「門限犯禁」者が現れ、「罰室」で謹慎の上勉強や掃除をさせられた。外室をせぬよう門番の監視を受けたりもしている。

明治六年二月十八日の「日誌」に七室十九人の寄宿舎の部屋割りが載る。ところで「日誌」はその日以降四月二十九日まで連続して残り、その後は四ヶ月分が欠けているという保存状況である。そこで二月十八日以降、四月二十九日までの記述を追って入塾者の記録をまとめると、四月二十九日時点で、八室三十一人と、働きながら学ぶ別室の塾生一人（後の長岡学校・長岡中学の数学教師長尾平蔵）、計三十二人の在塾者が確認できる。途中二人の退塾退学者があり、内一人はわずか十八日間の在学だった。他に二人の新規入門通学生と一人の通学組退学者がいた。それ以外の通学者数は不明。円了入学の一年前の在籍状況である。

このように通学者は明治六年の「日誌」に散見されるし、入塾の前に短期間だけ通学をするものが多く記されている。また明治六年九月十一日の「日誌」には、通学者の控え室である「通学生溜席たまり席」という語が見え、また「内外生徒」とか、諸連絡のため紙を張り出す際、宛先に「各室御中・通学生御中」などという語が以後見られるようになる。明治七年六月八日の「日誌」には「通学生多人数に相成り一室にては混雑に付、是迄の本塾罰室を

通学生溜にいたし二室にいたし候事」とある。

通学生存在は寄宿舎の収容人数が少なかつたことにもよるのだろうが、先に記した全校生徒数などから、円了在学中は寄宿生と通学生の割合は半々くらいだったと思われる。

区費生のこと

この頃新潟県は「県治報知」（新潟県立文書館所蔵）という法令等の布告・通達等の文書を各大区・小区などに出して周知させた。その中の明治七年五月三十一日付、「新潟県権参事南部信近」名の第百七十九号は次のようなものである。

新潟学校へ、区内身元之有る者の子弟は勿論、秀才にして貧窮なる者は、其の区入費を以て毎小区兩名以上、屹度差出すべき旨、布達に及び置き候処、区入費割賦方の儀に付、伺い出で候向も之有り、右は県会にて決定相成り候通り、資本金完備候上は、利子を以て学費支給致すべき筈に候得共、夫れ迄の間は、区内上等戸以上へ課賦候儀と心得べく、此の段相達し候事。

これは新潟学校及び各分校への入学者を増やすために、各区の経費を用いて二人以上入学させるよう各区戸長（小区長）に当てて差し出された文書である。学校の資本金が完備するまでは、各小区の富裕層である上等戸に学費を割り当てて出させるようにとの指示である。四ヶ月後の明治七年十月三日、「新潟県令楠本正隆」名で出された次の布告第三百十四号に見るように、この布達は全県的には余り実行されなかつたようだった。

区入費を以て新潟学校へ入学の儀、兼て相達し置き候処、今以て差出さざる向き多く、右は全く当今地券費等、格別入用も相嵩み候よりの儀に之有るべきに付、今後区費を以て生徒差出すに及ばず候条、其の資力あ

り区中の救助を請はざる者は、格別の儀に付、精々説論入校せしめ候様取り計るべく、此の旨相達し候事。地券発行など近代化へ向けての新政府の政策は、教育のための余裕資金を支出することを、中流以上の農民でも困難にした。しかし、第一分校では区費で学費を賄い入学したと思われる、少なくとも二人の生徒がいた。入学時期が上記文書より一年程遅れているのが気がかりだが、区費の制度を利用したと思われる資料がある。彼らは後述する初回の和同会参加者の中の二名で、野沢守之助と小幡仁三久という。

野沢守之助は中魚沼郡野口村（現十日町市）野沢駒次の長男。駒次は当時第十二大区小一区小區長（戸長）で、明治五年までは野口村庄屋。代々小村の庄屋を務める家柄であった。この野沢家文書が十日町市に寄贈されており、閲覧できる。その中に「約定」と題する次の文書がある。

今般新潟学校へ入学云々御達しの義、有り難き御趣意に付、銘々に於て厚く説論を遂げ候得共、当今地券旁々諸費多端の際、差し当たり苦情も之有る条、一応左の義には候へども、此の節の好機会を失ひ候ては、惜しむべきの至りに付、区中協議、左の約定して生徒を募る。

一洋学生両三名の義は当区学生之内より精々説論し、本分の中へ入学致さすべき事。

一入校生徒学費の義は、即今的情実余儀なきことに付、今度の生徒に限り、貧福に拘わらず、当分の中、区入費を以て壱人壱ヶ月金三円を支給すべき事。

一右約束の金員は、外課賦金同様、検査を受け前課の上、例規に照らし取り計るべき事。
右の通り約定候に付、各姓名自記調印致し置き候也。

明治八年八月 第拾二大区小一区 戸長 野沢駒次

一番組用掛 村越藤一郎（以下略）

この小区では対応が遅れたが、県の要請に従い区費生を送り込もうとしたのである。この好機を失うのは惜しむべきことであり、月三円を支給して入学させようというのである。三番目の約定の詳細は不明だが、他の割当金のように、例えば家の石高に応じて割り当てるとの意と思われる。当時の三円は現在の十数万円近い価値と考えられる。なお「組」とは区の下位区分で八番組であった。「用掛」はその長。

この文書に呼応するように、明治八年九月六日の「日誌」に次のように見える。

一 午前妻有郷、第十二大区小二区仁田村学校教員安原定入来、左の兩名近々入学致させ度き旨申込之有り。

同大小区野口村小区長 野沢駒次長男 野沢守之助 十四歳 十三年七ヶ月

同大小区仁田村戸長 小幡藤藏長男 小幡仁三久 十四歳 十三年九ヶ月

戸長野沢駒次は結局我が子を送り込んだのであった。円了の入学に遅れること約一年五ヶ月。円了より三歳の年少だった。和同会設立の約一年前である。小幡家も野口村の隣村、仁田村庄屋の家柄で中地主の階層である。九月廿二日入学し「日誌」に

一 野沢守之助小幡仁三久、午前入学入塾。兩名にて巻紙の保証状差し出し、之を請け取り置く。但し野沢鉄平同道。

とある。野沢守之助は童子塾二番室へ、小幡仁三久は同七番室へ入った。野沢守之助は明治十一年十二月二日の退学まで約三年三ヶ月在学した。その一月前の十一月四日の「日誌」に「野沢守之助実父駒次より、家計都合により守之助本月末より退校致させ度き旨申し来る」とあり、区入費はこの頃には出されなかったのかもしれない。なぜか小幡仁三久の記録は見当たらないが、「日誌」の欠落している時期に退学したらしい。田舎出の二人は常に行動を共にし助け合っていたようだが、何か家の事情があったのかもわからない。野沢守之助は十年後に三等郵便

局長になった記録が残る。

他に明治九年二月五日入学の阿部庄三郎という区費生がいた。次の様に記されている。文中「二日町」は旧栃尾市塩谷地区の村。

一 昨三日申込み之有り候左之者、入校入塾に付、童子塾三番室へ入れ候事。

第十五大区小四区二日町村、戸長阿部孫兵衛二男、区費生、阿部庄三郎 十二年八ヶ月

区費生は以上三人だったようで、この制度が終わっていた明治十二年二月十八日の「日誌」に次のような記録がある。「本県より兼ねて生徒の内、区費生族籍姓名全員とも取調べ差し出すべき旨達し之有り候に付、野沢守之助・小幡仁三久・阿部庄三郎、右三名族籍全員届書、郵便を以て之を出だす。」長岡の中心部より遠い所謂「郡部」からの入学生は他にも多くいたが、この区費生という制度が宣伝的な効果をもたらしたと思われる。

既に明治六年三月二十五日、小千谷の豪商西脇家の長男国三郎が入学入塾しているが、円了在学中の明治十年四月二十一日、二人の豪農の子息が入学した。豪商豪農も平民である。「日誌」に次のように記されている。

一 第十四大区小九区並柳新田大区長関矢孫左衛門入来。同人長男橘太郎、同大区小十区須原村目黒徳松弟捨三郎同伴、右両名入学入塾之義、申込み之有り。

七日後には孫左衛門の甥、柏崎の新道村飯塚弥一郎弟善作が入門入塾している。三人共に越後有数の豪農の子弟で、前二者は後年衆議院議員となる。関矢孫左衛門は三島億二郎の盟友で、北海道開拓に尽くしたことで知られている。こうして第一分校には様々な地区と階層の出身者が集まったのである。

兼学生のこと

兼学という語が「日誌」に表れるのは明治八年十月からである。

一二小区学校教師西郷葆午後四時前入来、彼の校生徒当校へ、兼学の義に付、談合之有り。(十月四日)

一小区長稲垣林四郎入来。小一区区学校兼学の儀談じ合い之有り。(十月七日)

一秦八郎より小一区区学校生徒、兼学入門の義に付、書面を以て申し来る。(十月九日)

小一区区学校、小二区区学校は、以後それぞれ坂之上区学校、表町学校とも記されている。その上級生が新潟学校第一分校の授業を受講することにしたのである。秦八郎、西郷葆とともに旧長岡藩士で校長だった。稲垣林四郎は後に古志郡長となる旧藩士。坂之上町は旧城内で士族の町である。表町学校は表町にあり主に長岡町人の子が行く学校だった。

両校は明治五年、その前身の分覺長岡小学校と市しちやう中学校が合併し、長岡学校の名称で二年半小学校教育を行ったが、士族と町人の越えがたい溝は埋まらず、明治七年九月に再び分離し、坂之上校と表町校となっていた。この二校の生徒・保護者の不仲、あるいは差別意識が完全に消滅するのは戦後になってからと思われる。(4)しかしこの二校の生徒の中等教育校への進学者は、一つしかない第一分校(後に長岡学校)に入学するしかなかった。この兼学生の記録は第一分校の名称が終わる翌九年九月頃まで続くが、その後はほとんどなくなる。その後の移行措置を含め、約一年間の制度だったようだ。兼学生の実際の入学は十一月から始まる。

一小二区区学校兼学生荒木栄吉、午後入門通学。但し保証状並びに束習金は兼ねて之を請け取り置く。(十一月八日)

このような兼学生の入門に関する記述は例外的で、数が少ない。多くは次に記す「日誌」のうちにいつの間に

か入門して、まとめて取り上げられたりしている。こうした人数をとまなう記録を総合すると、三十名近くの兼学生が存在した。小三区学校である千手学校も数人の兼学生を送り出している。

一左の八名より区学校試業前に付、当分欠席致し度旨申し出で候得共、当校稽古時間短く致し、欠席は致さず候方然るべき旨申し談じ、教師秦八郎へも右の段、様子柄承り之を遣わす。(人名省略、十一月十八日)

一町学校兼学生、彼の校にて試業に付、今日日欠席致し候旨、断り之を申し出づ。(十一月廿九日)

一町学校兼学生出席の者十三名呼び立て、是迄欠席多きに付、爾後欠席の節の規則等与え申し聞け候事。(二月十日)

一木曾僧旭並びに小二区学校兼学生・区費生徒は、是迄典籍のみ稽古致し居り候処、今回数学をも稽古致し度旨僧旭より之を申し出づ。(五月九日)

兼学生が二つの学校をどのように時間を分けて兼学していたか不明だが、これらの「日誌」から分かるように、小学校で試験(試業)があるとその数日前から第一分校を欠席し、なかなか授業(稽古)がはかどらず小学校へ苦情を言っている。それでも英語(典籍)と数学の授業をなるべく受けさせるようにしている。

兼学生の内何人かは先に引用した「長岡中学校入学者仮名簿」によって確認でき、この頃生徒数は急激に増加している。こうした試みは生徒募集の一環だったと思われる。しかしこの制度は長くは続かず、兼学生第一号かと覚しき荒木栄吉などは、次の「日誌」で分かるようにに在学十ヶ月足らずでの退校だった。

一左の両名小二区表町学校退校致し候に付、当校も退校致し度旨之を申し出づ。

荒木栄吉 清水友市(明治九年九月一日)

新潟学校第一分校から長岡学校へ

明治九年七月十二日付、県庁布告第二百八十二号により、新潟学校は廃止となり第一分校は独立校となった。これは前年末に新潟県令に就任した永山盛輝の教育政策の変更によることは先に触れた。布告の文章は次の通りである。

新潟学校教科改正、来る九月一日より、仮に開校候条、諸規則並びに告諭共相添え、此の旨布達に及び候事。但し長岡・新発田・柏崎・高田分校の儀は、同日以後分校名称を廃し、独立差し許し候事。

この布告に添えられた「諸規則」により「仮学校」という奇異な名称の学校となり、資本金が整うまでの移行期間となる三ヶ月をへて「長岡学校」となる。実質的に仮学校となった九月一日の「日誌」に次のように記されている。

一本日より暑中休業済み開校の事。

一県庁より兼ねて達しに付、本日より改正独立学校に致すべきの所、資本の故を以て確定致し難く、先づ従前姿にて稽古致し居り候事。

一新潟学校第一分校の標札は今朝取り逃マタし候事。

一標旗は是迄の分、相用ひ置き候事。

一井上円了本日より句読師雇い之を相勤む。(以下略)

九月一日、暑中休業が終わり授業が再開された。当時は始業を「開校」という。資本金不足ですぐには独立校となれず、これまで通り県の費用により学校を続けた。しかし第一分校の標札は取り外し、校旗だけは用いた。この日から井上円了を句読師にした、というわけである。

句読師は後に授業生といい、授業もする生徒のことで初級の生徒の授業を受け持った。円了自ら記す「履歴」(5)には「九年八月ヨリ十一月迄長岡洋学校工数学授業二雇ハレ、九年十二月ヨリ十年六月迄長岡中学エ支那学授業二雇ハレ在勤^{つかまつり}仕^{つかまつり}候」とある。「八月」というのは円了の記憶違いか。「洋学校・中学」は俗称である。授業生は担当の授業の他、他の教員が欠席した場合の代替授業もした。もちろんお互いに代替するのである。明治十年六月四日、円了解職退校一月前の「日誌」に次のようにある。

一 梅野助教昨日帰省致し候処、夕刻より腹痛堪え難く、本日出勤致し難き旨、書面を以て断り之有り。

一 右に付同人請け持ち授業、井上長尾両句読師へ申し談じ、右両名操^{さく}合^あい授業之有り。

梅野助教は数学担当であったから円了は漢文の授業だけでなく数学もやったし、場合によっては英語も代替授業をしたのではないか。やや後年になるが、明治十四年の「日誌」に授業生の給与月四円の記録がある。共に記されている英語担当助教の城泉太郎の給与は三十円だった。

明治九年十二月一日、長岡学校が発足するが、この前後を記す「日誌」はない。これを補う資料が先に引用した『長岡学校沿革略誌』である。それによれば何とか資本金を集め、更に学区内二十七小区から年額三十円ずつ出させる合意をえて開校が決まった。これまで英語数学の二科目の授業だったが「中学二模擬センガ為メ」漢学を加え、元長岡藩儒田中春回を雇い、三科目の揃った変則中学として長岡学校は発足したのである。このためしばしば「長岡中学」と呼ばれれ中学に準ずる学校として扱われた。職員は校長(非常勤)の他、事務係二、英漢数の助教各一、授業生三の計九人だった。助教とは洋学校以来の正式教員だが、公式な学歴を持たない教員の名称らしい。変則中学とされる一要因であろう。

和同会の成立と名称の意味

こうして長岡学校が発足する一月前の明治九年十月二十日、井上円了は他の授業生三名と生徒四名とで和同会を設立し学校へ届け出た。円了の和同会設立の意図について次のような証言がある。

和同会の起りも矢張藩士の子弟が余りに強く、即ち排他的心持を発揮する傾きが稍々あつたので少数の郡部方面から来て居た地主や寺院の子弟等が親睦平和を計る為め発足したものださうだ。

これは昭和二十七年刊行「和同会雑誌」九十六号掲載の長尾政之助「長中の懐ひ出」の一部で、七十六年も距たった証言でいささか不適切な感もあるが、この種の記述は他に見当たらない。しかし長尾政之助は、明治三十六年県立長岡中学卒業、後に長岡中学英語教諭として長年勤務し、長尾平蔵の甥でもある。長尾平蔵は初期の長岡学校入学、井上円了と共に授業生となり、後長岡学校・長岡中学の数学の教師となり、生涯をこの学校のために尽くした。しかも円了が和同会を設立した当初の結社人員の一人である。政之助は平蔵から円了のことも色々と聞いていたはずである。「さうだ」というのは長尾平蔵から聞いたのだろう。平蔵は旧長岡藩士の子弟である。士族の立場からのこのような発言であるから信憑性がある。目に余る士族の高慢さがあつたからだろう。

更に明治三十三年刊行の「和同会雑誌」二十二号に長尾平蔵自信が語り、望雲子と名乗る生徒が記述した「和同会沿革略」というものが掲載されている。これは和同会というより長岡学校沿革というのがふさわしい内容だが、和同会成立に関する部分は次の通りである。

端なくも二三の有志の計企を以て、全校学生の大同団結は成立しぬ、始め其事業たるや唯だ演説文章等の研究に止まりしが学科これより、日に月に駁々として上達し、上下の秩序、斉然として制裁又嚴格に、全校の風紀大に振興せり。之れ実に我和同会が兜城城北鵬翼を張るの濫觴にして故の農学士梅野四男吉君、現文学

博士井上円了君等は、実にそが第一原動力たりしものなり、

「全校学生の大同団結は成立しぬ」に注目したい。そのために学校全体が充実するに到ったという内容だが、党派的に分裂していた生徒たちがまとまったという趣旨であり、先の資料と符合するものである。

明治九年十月二十日の「日誌」に記される和同会設立結社人員八名は、「長岡中学校入学者仮名簿」によれば士族と平民が半々であった。翌二十一日に記される初回の和同会参加者と思われる入社人員は九名。内士族四、平民四（住所によるもの二を含む）不明一となる。ほぼ半々になるような人選だった。

これまで見てきたように、円了在学当時は学校の制度が変わり、長岡洋学校時代より生徒数も増え、その出身地も長岡近隣の生徒だけではなくなっていた。それに従って生徒の階層も多様化し、士族の占める割合も減っていった。平民の発言力が高まれば、士族の反発も増加する。そのような中で、士族と平民の融和的な集団が核となり注目されるようになれば、自ずと学校の雰囲気も融和的になると考えるのは順当な発想だった。従来一般には和同会は「相互の懇親を厚くし、演説の稽古を為さんとの目的」（『和同会雑誌』三十九号「和同会沿革」明治四十年）で組織されたとだけ語られることが多かったが、もう少し積極的な、このような動機があったとしなくてはならない。

この和同会の名称に関して、大正四年頃書かれた、井上円了自筆の、記入式アンケートの回想録「在学当時の母校」（大正四年の校舎全焼後、長岡中学校文庫開設に当たり、二十人の同窓が書いたもの、長岡高校記念資料館蔵）に、和同会の名称について「名称ハ論語ニヨリ和シテ且ツ同スルノ意ヲ取りテ拙者ガ命名シタルモノナリ」と記されている。

この「在学当時の母校」は、大正十年発行「和同会雑誌」六十七号で活字化されたが、その際「和シテ且ツ同スル」は「和して同ぜず」と訂正され、円了の書き間違いとして意に介されなかった。問題とされたのは約四十年後の再発見を経てからだった。

しかし、昭和十五年、長岡中学国漢科の教諭猪俣金五郎が「和同会雑誌」九十二号「和同の精神」で初めて「和同」の意味を問題とし、詳細な分析を加えた。『論語』の一般的な朱熹の解釈でいけば「和して同ぜず」の意味を「和同」の二字で表すのは不都合であり「和不同」でなくてはならないとすうえで次のように論じる。『礼記』に「天地和同して、草木萌動す」の例もあるように「同」には「和」と対立する意味が本義的にあるわけではなく、「和不同」から発した意識が、その語調の悪さもあり、本来的な言語意識によって「和同」に落ち着かせ、論理的矛盾を解消させた。更に「和同」と熟してもその中心は「和」一字にあり「同」はそれに添えられた副次的な意味を表すに過ぎない。「和して同ぜず」の精神は「君子は和す」ということであって、「小人は同ぜず」や「君子は同ぜず」はその注解や補足でしかない。こうして「和而不同」が「和同」の二字によって表される不自然は超克された。

昭和三十年代にはいり、埋もれていた校史資料の整理などがあり、井上円了自筆の「和シテ且ツ同スル」の再発見があり、再び国語科の教諭などから「和同」の意味が時々語られた。それぞれ「和して同ぜず」と「和して且つ同ぜず」（表記は清音だが「うむの下は濁る」で読みは「ず」となる）の二つの意味を巡る論考となる。「和して同ぜず」は個人の行動規範としての意味とし、「和して且つ同ぜず」は集団の理念として意味を持つと解し、あるいは集団の論理として、本義（前者の意味）を超越し後者の意を円了は得たのだとし、あるいは両者の止揚された意味を表すとした。

平成十年代、国語科教諭長谷川潤治は、「和同」の意味を和衷協同意とする円了自身の記述（『佐渡国巡行日誌』所収）を引きつつ、「同ず」の意味合いを強く打ち出すために「和而不同」を換骨奪胎し、パロディ的に「和して且つ同ず」としたものとす。（6）

円了は「論語により」と言っているのだから、敢えて「和して且つ同ず」ともじることによって、そこに二つの意味、「和して同ぜず」と「和して且つ同ず」の意味が発生する。本来同じではならないところを敢えて同ずるとは、謂わば手段を選ばずに和することを強調した意味に取るしかない。それほど学校内の融和親睦が求められていたのは、長尾政之助の証言の通りである。言葉は文脈によって意味を変える。その言葉の背景、社会的文脈を抜きにして意味は求められない。

今日的には「和同」の中に個人の行動規範と、集団の理念の二つの意味を読み取るとは大変合理的な考え方で、生徒会の名称という文脈にあつては説得力がある。しかし円了の創設期の和同会にとっては前者の意味よりも、後者の意味にこそ重点があつた。

創設期の和同会に関するいくつかの疑問

1 演説会の実態について

初期和同会に関する資料は明治九年の「日誌」しかない。それには

一 井上円了より今般和同会設立、明廿一日土曜日より、毎土曜日に相催し度旨にて、規則書差し出し談じ之有るに付、許可致し候事。（明治九年十月廿日）

一 本日和同会開会にて、午後一時より二番講堂（に）於て開筵。規則の通り作文等より初まり、四時前相済

む。

一右傍聴として田中春回入来、兵太郎にも同断出席。(同年十月廿一日)
とあり、これに参加人員名を添えて記すばかりである。

ここには「作文等」とあつて演説とは記されていない。和同会の目的についても全く記述はない。これ以降の土曜日には同じことの繰り返しであつたためか、和同会開催等の記録は円了の退校までの八ヶ月間記されていない。初期和同会の活動記録は初回以外残らなかつた。現在のイメージのような演説会をした確証はなく、作文の発表会とか勉強会、意見交換会などであつた可能性が高い。そのような想像を裏付ける回想も残っている。初期和同会参加者の回想は、先に引用した長尾平蔵の談話筆記だが、「始め其事業たるや唯だ演説文章等の研究に止まりしが」とあり、演説そのものではなく「演説の研究」という言い方になつている。そもそも演説という語は福沢諭吉によつて作られて数年、和同会会員はその実態を見たことはなかつたと思われる。それと符合するように後に長岡中学の校長になつた坂牧善辰は次のような回想文を残している。

抑も此会は初め井上円了博士が同志等と自作文章を持寄りて或は朗読し或は批評せんとの旨意を以て企てられた会合であつたのが進歩して演説会となり、更に進歩して立派の組織を持てる自治的団体となつたのである(和同会雑誌六十七号、大正十年刊)

また坂牧は「弁論練習のために創設したる有志の会合」(和同会雑誌五十四号、大正三年刊)とも述べているが、初期和同会は、恐らく見たことのない演説の「研究・練習」であつて演説そのものではなかつた。ただ明治七年六月に開始されたばかりの慶應義塾の三田演説会(7)を、約二年後にまねようとしたその先進性を評価すべきなのである。坂牧善辰は明治十四年の長岡学校入学で、初期和同会を直接知る人ではない。その証言を鵜呑みには

できないが、円了退校後四年目の入学で、その当時は所謂再興した和同会となり、長尾平蔵や先輩からの言い伝えも聞いていたから、信憑性は高いと思われる。

2 和同会の中絶とは

後に長岡中学の教員となり、生徒の絶大な信頼を受けた本富安四郎は、坂牧より一年早い入学だが、明治四十年、「和同会雑誌」創立三十五周年記念号（三十九号）に「和同会沿革」を書き残している。その人格的な評判の高さと、生徒の懇願により教員として最初の和同会会頭になったという経歴から、この「和同会沿革」という文章も権威を持ち、あまり疑われることなく、和同会の歴史を語る基本資料となったようだ。そこに次の様に記されている。

明治八年本校生徒井上円了氏等、有志の人々の発起にて、相互の懇親を厚うし、演説の稽古を、為さんとの目的にて、一会を組織し、君子は和して、而して同せずの意を取り、名けて、和同会と云ふ、是れ、本会の起原なり。……井上氏等は、随分熱心に、会務に斡旋し、毎土曜日の午後を以て開会し、演説又は討論を為せり。……明治十年には、井上氏等も上京し、熱心家の滅せしより、大いに衰微を來たし、演説者等もなく、已むを得ず、文章を作り、之を朗読する杯の事あり、其後遂に永らく、開会することもなく、ほとんど廢滅の姿なりしが、明治十三年の末に至り、再興の議起り、大いに有志者を勧誘し、久々に開会し、夫より三四人づつの、演説者あり、

この「廢滅」「再興」に類する記述は他の関係文書にも散見され、「円了学校を去り和同会中絶」との事柄は、歴史的な事実として受け継がれ、長岡高等学校の「学校要覽」にも毎年記されている。

しかし、本富は「中絶した」とは書いていない。また「日誌」を追っていくと和同会は中絶した訳ではないことがわかる。円了が長岡学校を去った三ヶ月後に和同会に関する記録が「日誌」に表れ、その後も明治十三年末までに十数回の記録が出てくる。先述したように「日誌」は欠けた部分が多く、もし全ての「日誌」が残っていればその記録も増えるだろう。

先に引用した、初回和同会参加者でもある長尾平蔵の談話筆記「和同会沿革略」には「明治十一年にいたりては、弁論会の出席者、僅かに故の工学士廣川廣四郎君、及び余の二名のみなることあるにいたれり」とあるが、廃絶に類する記述はなく、したがって再興に関することも記されていない。和同会の中絶と再興ということは、本富の誇張した言い方が一人歩きする様になったことによる伝説と言うべきである。

3 和同会再興について

円了退校の一年数ヶ月後の明治十一年九月、英語担当の助教として城泉太郎が着任。城は慶應義塾で英語を学んだ旧長岡藩士で、演説の訓練も受けてきた。着任二ヶ月後の「日誌」に次のように見える。

一城泉太郎より左之揭示の通り咄合い之有るに付、生徒へ心得の為、之を布告に及ぶ。

小生儀明金曜日を始めとして、毎金曜日午後第四時より、式番講堂に於てスペンセル氏教育論の演説致し候。校中何人に限らず傍聴勝手たるべし。(十一月廿八日)

金曜日の特別講義のような趣であり、和同会とは明らかに異なる。しかしこの城こそが和同会を再興させ、演説を本格化させた中心人物である。しかし本富が記す再興は、城来校のまる二年後の明治十三年末である。毎週のように演説をしていた城が、時に活動していた記録の残る和同会に対し、演説などの指導や助言をしていなかっ

たはずはない。この点でも円了退校後の明治十年後半から十三年末までの「中絶」説には疑問を抱かざるを得ず、本富の記述の全てを認めるには留保を要する。

4 和同会の目的とは

明治二十七年発行の「和同会雑誌」二号に和同会規則が掲載されたが、現存するもつとも古い規則である。その第二章「目的」には「互ニ弁術ヲ研キ智徳ヲ淬励シ併セテ親交ヲ厚スルニアリ」と記され、その手段として演説・討論・質疑・書籍の閲覧・雑誌の発行が挙げられている。

これが残された最も古い和同会の目的を記した文献である。円了自身が記した和同会の目的を記す記録は残されていない。伝聞として最初に初期和同会の目的を明記したのが先に引用した本富の「和同会沿革」である。しかし円了の「和して且つ同ずる」という意図は伝聞として伝えられず、本富は円了の意図を理解することはなかった。あたかも円了がそう記したかのように「相互の懇親を厚うし、演説の稽古を為さん」として和同会は設立されたとするのは、飽くまでも伝聞であり、やはり多少の留保が必要である。

時代によって和同会は集団としての規模や性質を変えているのであり、明治三十三年に「以て剛健質朴の校風を發揮する」という異質な理念を目的に加えたり、昭和十一年には「弁舌を磨き」が削除されるなど、その目的も時代に応じて変えていることを忘れてはならない。

初期和同会に関しては、伝承されてきたことを自明のことのように語られていることが多いが、「日誌」や「和同会雑誌」の丁寧な分析により再検討をする必要がある。

附記

井上円了は、正しくは新潟学校第一分校・仮学校・長岡学校に在学したが、煩を避けてタイトルには「長岡学校」で代表させた。

【註】

(1) 「和同会雑誌」87号（昭和十一年刊行）4年生上野壽一「和同会に対する私見」に「戊辰の役の際お上への上納米の中過納の分が、下賜された時焼き出されて食ふに困つてゐる人達を前にして、三島翁が『食はれぬからこそ教育するのだ』と叫ばれた」とある。また同78号（同七年刊行）元田龍佐「在任当時の回顧」に「長岡が維新の際の大打撃で疲弊困憊のドン底に在つた間に、ほんの一握りの土族の共有金の様なものを、何に使ふべきかと当時の先輩が考へたらしい。そしてその金を二分して一半を以て学校を、他の一半を以て病院（長岡病院）をたてた。何といふ大見識でありませうか。」更に同78号（同六年刊行）1年生岸野端二「長岡洋学校創立まで」に「米百俵」と同様の物語がこの余剰米に関して記されている。

(2) 県庁布告第二百八十三号の終わりの部分に以下のように見える。「自今同校教科を改正して、百工化学となし、百般の物品を精製するの術業を教授し、工業開達の基を立て、別に和漢英書を以て普通の学科をも講習せしめ候条、精々就学修業致すべく、此旨告諭に及び候事。明治九年七月十二日新潟県令永山盛輝」

(3) 小林虎三郎の明治五年五月二十五日付、三島億二郎宛書翰に「兎角諸旧藩の風習にて、平民教育に心を用いず、土族のみに教育費を掛け、凡才の者に俊秀に教ふるべき学科を授け候様の不適當なる事」とある（長岡高校記念資料館蔵、また『米百俵』所収、頒布会昭和五十年発行）。

(4) 大正十三年生まれ、昭和十一年阪之上小学校卒業、昭和十六年長岡中学卒業の黒田鐮藏氏の実体験による。なおこの当時表町小学校にも土族の子弟の入学はあった。大枠での話である。

(5) 前掲『浦水井上円了漢詩集』所収「屈蠖詩集」原文影印部分。
(6) 「井上円了の原風景を読む」（『北方文学』五十五号所収、平成十六年）

(7) 『慶應義塾百年史』上卷(慶應義塾)